

---

# 俺と彼女の電波的關係

神家シンジ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と彼女の電波的關係

### 【Nコード】

N6600S

### 【作者名】

神家シンジ

### 【あらすじ】

「突然だが、俺は恋をしている」

この物語は俺の一言から始まる

だが、俺の恋した美少女はちょっと痛い電波さんだった…

## 俺の恋と彼女の微妙な関係

「俺と彼女の電波的關係」

「突然だが俺は恋をしている！」

この物語は俺こと神地龍之介のこの一言から始まる

「ゴホ、ゴホ・・・マジかよ？お前が恋？」

こいつは俺の親友上影響・・・中学からの友達だ・・・

「冗談でこんなこと言うわけねえだろ！マジだよマジ大マジだ！」

と俺は少し目を細めて言った

「でも、いきなり何でそんなことを言ってきたんだ？」

「だってよぉ～そろそろ高2の夏休み・・・彼女作るなら今つきやねえだろ？」

「まあ～そうかもな　で、相手は誰なんだ教えるよ！」

と響は意地の悪い笑みを浮かべて聞いてきた

「ここまで言って隠し通せるなんて思っちゃいないよ！」

「さっすが龍だぜ！で、誰？」

「神宮寺真琴だ・・・」

俺はそつと響の耳元でつぶやいた

「マジか？よりもよって神宮寺かよ！？」

と大きな声で言ったため昼休みに教室で飯を食ってたクラスメイトほとんど全員振り返った・・・神宮寺も・・・

「黙れって！ちよ、みんなこっち見てるじゃねえか！」

「おつとすまんすまん！ちよつと動揺しちゃってな・・・」

「いいじゃねえか！神宮寺は成績優秀、容姿抜群おまけに性格もいいじゃねえか！響君これのどこに驚く要素があるんだね？」

俺は調子に乗って（中二的なノリ）で尋ねた

「いや、別に、てか特には・・・」

「おいおい、歯切れ悪い言い方じゃねえか！らしくねえぜ！」

「何でもねえよ！」

「そ、そうか？」

俺は不満だったがそこで引き下がることにした

「でもよお、あの神宮寺と付き合うならそれなりの覚悟がいるぜ！」

「なんでだよ・・・？」

「いや、少し昔の話になるんだが、中学の時色々問題起こしたみた  
いだけ・・・」

「ははは、ないない、ないだろ！神宮寺のどこに問題を起こす要素  
があるんだ！」

「ま、信じたくねえならいいぜえ〜！べ・つ・に！」

響はまたもや意地の悪そうな笑みを浮かべて言った

「まあ〜心の奥底にでも残しておくよ！」

「そうしとけて」

キーンコ〜ンカ〜ンコ〜ン

「やべえ、授業開始だ！急げ龍！」

「先行つてろ！響！後ですぐ行くから！」

「おう！そうさせてもらうぜ！遅れるなよ龍」

とあわただしく会話をして響は理科室に向かった

俺も急がなきゃやべえーな 教室には後俺だけ・・・か？いや、神  
宮寺がいるじゃねえか！もしこれがギャルゲーだったらとんだフラ  
グだぜ！とりあえず声かけよ・・・

「神宮寺も急いだほうがいいぜ！それとも一緒に行くか？」

「急ぎはするけど一緒に行くのは全力で拒否させていたたくわ！」

「そ、そうですか・・・」

俺の誘いをこうも簡単に・・・悔しいぜ・・・

「じゃあ先行くから・・・神宮寺も急げよ！」

「ええ・・・」

神宮寺真琴・・・容姿端麗才色兼備だっけ？でも、どこから見ても  
きれいだよなあ〜あの、サラッサラな黒髪そして丰满なボディ・・・  
完璧だ・・・美しい・・・ってこんなこと考えてる暇じゃねえ！急

がなきゃ！

俺は教室を後にして全力疾走で理科室へと向かった・・・

## 俺の担任と親友(?)の関係

「よお！龍早かったな！」

「ハアハア・・・こ、この俺様にかかればこんな・・・距離一瞬で移動・・・できるぜ・・・！」

俺は息を切らしながら響に笑顔で言った

「その根拠のない自信まさしく中二病だな！」

「それって馬鹿にしてんのか？それとも褒めてんのか？」

「どっちもだ！」

「そ、そうか・・・？」

「龍そろそろ後ろ見たほうがいいと思うぜ・・・」

「え、何で・・・って先生じゃねえか！」

「よお神地お前ら楽しそうだな！俺も混ぜてくれ！」

この人は俺らの担任兼理科の担当教師阿久津英人 筋骨隆々だっけか？とりあえずモリモリだ・・・なぜ、理科の教師になったかは不明・・・保体の教師になればいいのに・・・

「で、何の話で盛り上がったんだ？」

と阿久津は笑顔で尋ねてきた・・・（逆に怖い・・・）

「龍之介の素晴らしい走りについてです・・・」

響はそう言い俺のほうを横目で見た・・・

「そうかぁ～素晴らしい走りかぁ～ぜひとも俺にも見せてほしいもんだな！」

「また、機会があれば・・・」

俺は冗談を交えて言った・・・女子がクスクス笑っている・・・神宮寺も・・・って神宮寺いねえじゃねえか！

「どうしたんだ神地？そんなに周りをキョロキョロして・・・発情期か？」

「発情期にそんな症状ねえだろ！」  
と反射的に俺はつつこむ

「じゃあどうしたんだ？」

「別にどうもしてねえっすよ」

「ほおゝそうか・・・とりあえず授業を始めようか！」

（どうしたんだ龍？）

と響が声をひそめて聞いてきた

（神宮寺がいねえんだ！）

と俺は返す

「マジかよ！？」

響はまたも大きな声を出した

「うつせえよ！落ち着け！」

と俺も響に負けず劣らず大きな声で言った

「俺から言わせてみればどちらもうるさいと思うがなあゝ」

「すいませんでした！」「」（棒読み）

「うん？何だ？聞こえんぞ！」

くそっこの鬼畜教師が！

「もうしません！許してください！」「」（全力！）

「おおゝそうか許してやらんでもないぞ！」

いや、許せよ・・・

「じゃあもうすんなよ！」

「はあゝい」

（響、この話はまた後だ！OKか？）

（ああいいぜ！）

と俺たちはアイコンタクトを交わし授業へと気持ちに向けた

キーンコンカーンコン

「じゃあここまでで終わるか！」

阿久津はハリのある声で言った

「起立、気をつけ、礼」

「おっしや、終わったな！で、どうしたんだ龍？」

「さっきの授業神宮寺がいなかった・・・」

俺は響に言った

「それは俺も確認した・・・お前最後まで教室にいたんだろ？」

「いや、神宮寺もいた・・・」

「へえゝまあがんばれ！」

「軽いなあオイ！」

「だって他人事じゃんか！」

響はにやりと笑ってそう言った

「そ、そうだけど・・・」

「がんばれよ龍！応援するぜ！」

「おしゃああ！神宮寺を俺が見つけてやるぜ！」

「そのいき・・・だ・・・？」

「ギャルゲーならば完璧なhappy endのフラグだぜ！行ってくる！」

「いや、すまん俺がお前をあおったのが悪かった・・・戻ってこい！」

「行かせてくれ！このフラグを俺のものにするんだ！」

「もしギャルゲーでもこれはフラグでもなんでもない！」

自信たつぷりに響は言った

「な、なんでだよ・・・？」

「だって教室にいるじゃないか！神宮寺」

この時自分でも顔が赤面していくのを感じることができた・・・

じ、神宮寺が俺を・・・クスクスと笑ってる・・・

「うわあああああ！」

「おい、どうしたんだ龍？とりあえずー」

俺は響の言葉を最後まで聞かず全力疾走した・・・目的地はベランダだ！

「おい！早まるな龍！」

この時点で俺はベランダの柵に足をかけていた

「うつせえ！死なせてくれ！これ以上俺のハート傷つけないでくれ！」

「落ち着け！落ち着くんた！ほら見ろ！」



響は何かを指さして言った

「え、何？」

その指の先にはクスクス笑ってる神宮寺がいた・・・またも笑われているよし！死のう！

「ちくしょー！はめやがったな響！」

「さあ思う存分死んでこい！」

響は満面の笑みだ！どうやら俺らは親友じゃなかったみたいだね！

「お前らずいぶんと楽しそうだな！」

「うっせえ！楽しくなんかねえよ！・・・って先生じゃねえか！」

「終礼だ！」

と響は俺に笑顔で言った

「お前ら放課後職員室に來い！俺と共に青春の汗と涙を流そう！」

「俺もかよ！？」

響は驚いて聞き返す

「当たり前だ！神地にはゆっくりと人生相談してやる！」

「暑苦しそうなんで全力で拒否させていただきます！」

「そう言うな！俺はお前の素晴らしい走りとやらをビデオに収めてネットに投稿するだけだ！」

「あんたは教師失格だ！」

俺は全力でつつこんだ！

「とりあえず座れ！」

「はあゝい」「」

全てが終わったような気がするぜ・・・

## 俺の妄想と妹の関係

「で、何で飛び降りようとしたんだ？」

放課後俺たちは阿久津に言われた通り職員室にいた

「た、ただのパフォーマンスですよ！ホントに飛び降りようなんてしてません！な、響？」

「こいつなんだか女子に笑われたのがショックだったみたいで・・・」

つく、やはり響てめえとはいずれ決着をつける時が来そうだな・・・

「ほおゝそうかやはり青春だな！俺も高校の時は・・・（以下略）」

（響てめえが余計なこと言うから長くなっちまっただろうが！）

（今回は反省するぜ・・・）

・・・1時間後・・・

「彼女はこう言ったんだあなたしか愛せませんって！」

「へ、へえゝすごいですねゝ・・・」

俺たちは阿久津の話により心身ともに極限まで追い詰められていた・

・

く、くそこまでHPを削られるとは・・・さ、さすが阿久津だぜ・

・

「というわけだったんだ！どうしたんだお前ら？そんなに疲れた顔して！」

「「ああゝだ、大丈夫つすよ」」

と俺と響は一音一句違わずに言った

「ほおゝそうか！もうこんな時間だな帰っていいぞ！」

「あざっす！」（響）

「どうもです！」（俺）

「おう！じゃあな！」

と阿久津のハリのある声を背中に俺たちは職員室を後にした

「なあゝ龍明日、日曜だしどつか遊びに行かね？」

響が能天気と言った

おいおい、何でこいつこんなに元気なんだ？HP何万だよ？

「行かねえのか？」

「あ、どっちでもいいぜ・・・」

「おっしや決まり！で、どこ行く？」

「どこでも好きなとこに行きなさい！」

「じゃあ神宮寺の家でも行くか？」

「ドサツ」（俺が極度の緊張により倒れた音）

「ガッ」（それを響が起こした音）

「じよ、冗談でも言っている冗談と言っちゃいけない冗談があるって小学校の先生に習わなかったか？ドアホ！」

「いやあゝそこまで動揺するとは思わなくてよあゝ」

響はすまなそうに笑って言った

「まあゝメールでもしろよそれで決めよ！」

「ああそうだな！じゃあな龍！」

「おう！」

と響を見送り走って家に帰った空には星がきれいに輝いていた・・・

（で、どこ行くよ？）（響）

（あ？知らねえよ！）（俺）

これと同じメールのやり取りを俺たちは1時間以上にわたってしていた、

（だから、どこ行くんだよ龍！）（響）

（そんなこと俺に聞くな！言ってきたお前がき・め・ろ！！）（俺）

（じゃあ神宮寺の家にでも・・・）（響）

神宮寺の家・・・淡い妄想が脳裏をよぎる・・・でっかい和風のおうち・・・そこにいる神宮寺・・・厳格な父に優しい母・・・なん

て理想的な家なんだ・・・the日本の家族！

ツハ！現実世界に戻ってこねば！やばいやばい危うく昇天してしま  
うとこだった・・・

「オイ！兄貴変な呻き声上げんな！」

と言つて妹の涼子がドアを蹴つて部屋に押し入ってきた

「何！？俺は呻き声を上げてたのか？」

「真琴がどうか・・・the日本の家族がどうたら・・・」

「とりあえず忘れてくれ！」

「私も忘れたいから・・・」

物わかりのいい妹だ！助かるぜ！

「ありがとうわが妹よ！恩に着るぜ！」

「うわ、キツモ！近寄らないで！」

「近寄つてねえしここは俺の部屋だ！」

「一つだけ聞きたいんだけど・・・何でそんな顔赤いの？」

「その質問にはお答え出来ません！」

「分かりましたよ！出ていきますよ！じゃあな馬鹿兄貴！」

「うっせ！誰が馬鹿兄貴だ！とりあえず学年2位の学力を誇る男だ  
ぞ！」

バタンツ

大きな音を立ててドアが閉められた

この間にも響からメールが送られてきていた・・・

2分前

（大丈夫か？また倒れてねえか？）（響）

1分30秒前

（仕方がないが、神宮寺の家に行くことにしよう・・・）

1分前

（俺はお前の恋を応援するぜ！当たって砕けて死んじまえ！）

そして現在

（僕キミとちゃんと話したいな！用件は何なの？）（俺）

（死んじまえ（笑））（響）

（今からてめえを地獄の淵にたたき落としてやんよ！！！！）（俺）

（明日9時に駅前な！）（響）

（後十数時間がてめえの余命だ！楽しみに待っとけ！）俺

ここで俺は携帯の電源を切った

神宮寺の家か・・・楽しみのような・・・恥ずかしいような・・・  
まあ寝るか・・・

「ガンガン！ガンガン！」（隣室の大音量のステレオの音）

「ハハハハ！！」（1階でテレビを見ているおふくろが笑う声）

「（俺の声にならない叫び）

「うつつつつせえんだよ！！！」

とりあえず手始めに涼子から・・・

そう考え俺は妹の部屋に殴りこみ

「黙れ！消えろ！死ね！」

「はあ～～？」

「もう一度言つてやろうか？うつせえんだよ！」

久々に俺はマジギレした

「・・・すいません・・・」

素直な妹だ・・・よし、戦利品でも持ち帰るか・・・

「ちょ、兄貴何してんの？ステレオとつちゃだめ！」

「冗談だよ・・・」

「目がマジで怖いけど・・・」

1人片づけた・・・次はおふくろか・・・

俺はものすごい勢いで階段を駆け降りた

「龍ちゃんどうしたの？」

おふくろは不思議そうに俺に訪ねてきた

「だ・ま・れ！」

「ええゝ何にもしゃべってないじゃん！」

「テレビ消せよ！」

「何で？」

「うつせんだよ！俺もう寝たいんだ！」

「じゃあ音ちっちやくするね・・・」

「そうしろ！」

階段を駆け上がり俺はベッドに入った

（午後１１時４０分就寝）

# 俺の遅刻と彼女の電波的關係

まずった・・・8時45分だ・・・急いでも駅まで20分はかかるぞ・・・つくどうすれば・・・しゃあーねえあれやるか・・・

「龍ちゃんおはよう!ごはんで来てるよ」

パジャマ姿のおふくろは俺に言った

「すまんなおふくろ俺は忙しいんだ！じゃということぞ！」

必殺「おふくろの言葉なんて耳に入っていないよ！」だ！

「龍ちゃん食べないの？」

無論俺だって食いたいのはやまやまだが・・・そんな暇はない！

無視して俺は出かけた……

「つく、無理なのか・・・やはりこのスピードじゃ・・・いいや、いける気がするぜ！俺のチャリのスピード見せてやる！」（独り言）

8時59分駅前に到着！

「ハアハア……間に合った……響は……つていねええええ

!

くそ、電話するか……ええ、つとこれか……

（おかけになった電話番号は現在使われておりません・・・）

こ、これは・・・電話番号変えてやがった！そして、なぜ俺に言わない！やっぱり俺ら友達じゃないみたいだね・・・

急いで気づかなかったけど……俺の寝た後メール来てんじゃん・

•

(電話番号変えた××× ××××××××だけど、お前は着信拒否してるから(笑) 集合場所変える、場所はおまえんちな! 9時半に行くから!) (響)

「ぶっつっつっつ殺す!!!」

やつとは決着をつけねばならんな・・・とりあえず戻るか・・・俺は全速力でペダルをこぎ家に戻った

9時20分自宅着！

まだ10分あるな・・・どうでもいいが、腹減った・・・

「よお龍俺を待っててくれたのか？」

こついう時に限ってこいつ来るの異様に早いな・・・きつといやがらせなんだろう・・・

「響か・・・で、どこ行くんた・・・？」

「神宮寺の家！」

「バタツ・・・」

「大丈夫か龍？」

「響　我が人生に一片の悔い・・・な・・・し」

「りゅーーーーーう！」

「朝から何男二人で抱き合ってるの？気色悪いよ・・・」

「おおー涼子ちゃん！久々」

「そうだね・・・で、何でうちの兄貴は倒れてるの？」

「ああこれはじんー」

響がここまで言ったところで、響の口に手をつっこみなんとか防ぐことに成功した

「じん何？」

「神社巡りしたいなあーって思ったんだよ」

俺は白々しく続ける

「へえ・・・そう」

そう言つて妹は俺をにらみつける

「お前はどっか行くのか？」

「ひ・み・つ！」

「ふーんあつそ！興味ねえよ！」

「バイバイ！道の真ん中で抱き合つてるとキモいよ！」

と言に残し妹は走り去って行つた

「じゃあそろそろ行くか！」

響はそう言つて立ち上がった

「ま、マジ？まだ心の準備が・・・」



「当たって砕けて死んじまえ！」

「とりあえず手始めにてめえを殺してやんよ!!」

と悪役のようなセリフを吐き俺は響に襲いかかった

「そんなことするんだったら、教えてやんねえぜ！」

意地の悪い笑みを浮かべて響はそう言った

「その手にはのらないぜ・・・すいませんでした！」

襲いかかるうとするのに体が動かない、どうやら体は正直みたいだ・

・

「よっしゃ行くか！」

「おう！」

道の真ん中で大声をあげる俺たちを道行く人々が見る・・・だが、  
気にしない

「てなわけでこれ地図な！」

「???」

「俺行かないから1人で行って来い！」  
バタンツ

「落ち着け！大丈夫だ！気をしっかり持て！」

「そ、そうか・・・？」

少し頭がクラクラする・・・

淡い妄想が止まらない・・・神宮寺・・・これがきっかけで付き合い  
つちやったり・・・真琴とか龍ちゃんとか呼び合ったりしちゃっ  
て・・・

「オイ！龍戻ってこい！カムバック現実世界へ！」

「ツハ！俺は何を・・・？」

「よだれ垂らしながらニヤニヤしてたぞ！真琴・・・真琴・・・つ  
てつぶやいてたし・・・」

「そ、そんなことを・・・」

はたから見れば不審者です！

「じゃあ行って来い！健闘を祈るぞ！」

「お、おう！」

俺たちは手を握り合って健闘を祈った

「じゃあ行ってくるぜ!!」

「じゃあな龍!」

俺は響に背を向け走ってその場を去った・・・

午前10時7分いざ出陣!

なかなか遠いな・・・神宮寺の家・・・電車使うか? いやいや、金  
がもつたいない・・・

このチャリを使うしかないのか・・・

出陣から30分俺はまだ神宮寺の家にとどり着けないでいた・・・  
は、腹減った・・・

朝飯を食っていないせいか無性に腹が減った

くっ、駅前で何か食うか・・・

「うん? あれなんだ?」

数百メートル先に女子が見える

「ゴスロリファッションかぁよくあんなん着て恥ずかし・・・く・・・?  
」

そこで俺は言葉を見失ったその女子に見覚えがあつたのである・・・  
いや、見覚えなんてものではない、いつも俺が教室で姿を見るいや  
むしろ姿を追っている

そう・・・神宮寺真琴だったのだ・・・

この時を境に少々慌ただしく俺と彼女の関係が変わってくるのだが、  
俺はまだその時は知る由もなかった・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6600s/>

---

俺と彼女の電波的關係

2011年10月8日13時59分発行